

〈祈りのために〉

助産婦はいずれも神を畏れていたのです、エジプト王が命じたとおりにせず、男の子も生かしておいた。(出エジプト記1章17節)

「出エジプト」はイスラエルの救いの歴史の核心とも言えます。イスラエルの民のエジプト脱出の事件を通して、神が創造の初めから約束したもう、被造物が良きものとして祝福され、人間が神の民となるためにどのように関わってくださったかを語っています。

良きものとして創造された人間が神から離れ、罪のため苦しんで生きようになりました。神はアブラハムやヤコブの子孫を通して、救いを用意してくださいました。

ヤコブの子ヨセフを通して、エジプトへの寄留で助けられたイスラエルも、時を経て奴隷の生活となっていました。エジプトの新しい王によってさらに大きな迫害を受ける時代を迎えます。イスラエルは約束どおり神の祝福を受け、大きな群れとなりましたが、王はこの民が強力であり、やがて反逆して国を乗っ取るかもしれないとの不安のため、神の祝福を食い止めようと自ら神のように振舞う暴挙に出ます。徹底的に重労働を強制し、人間の生きる尊厳、自由を奪い命をも抹殺するのです。二人の助産婦は生まれる男子を皆殺すように命じられます。かよわい二人の女性の名はシフラとプアです。命の書に名を記された者たちであり、全イスラエルの男子の新生児を殺す権を振るう王は無名でやがて消滅する存在です。

二人の助産婦はエジプト王が命じたようにせず生かしておきました。王の命令に従わないことは、勇気があることです。自分の生命の危険を意識せざるをえないでしょう。彼女らも恐れと戦わねばならなかったに違いありません。しかしそれ以上に神を畏れる日々の生活がありました。神を信頼し神に身をゆだねて生きていたのです。「彼女たちは、王の命令に従って生まれた男の子を殺すことは神のみこころに反すると確信していました。この世の王の命令が神のみ旨に反する時には、王に従うことが罪になることを知っていました。だから、自分たちの命を守るためならこんな赤ん坊の命なんて、と思うことは無かったのです」。彼女たちは「真実の神の信仰者でした。二人の信仰は、ファラオの命令を破って罰せられるよりも、神に背くことをおそれたのです」。イエスさまは「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」(マタイ10:28)と教え、ペトロもまた「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。」(使徒言行録5:29)と語りました。

救いの御業を進めてくださる神さまに逆らい、神の命を抹殺するような力や、仕掛けがわたしたちの周りを取りまいています。わたしたちに襲ってくるさまざまな恐れの前に、救い主イエスさまをお遣わしくださった神さまに全的信頼をよせて恐れることなく歩んでまいりましょう。

〈祈り〉

主なる神さま。不安や恐怖でたじろぐことがありますけれど、あなたがいつも神の民を導き祝福くださることを感謝します。神に逆らう勢力に加担せず、神のもとに立たせて下さい。

加藤正勝(滝川教会牧師、大会靖国神社問題特別委員会委員長)

日本キリスト教会とヤスクニ問題

近藤信雄（下関教会長老）

江戸時代末期に宣教師が来日し、彼らの働きにより 1872 年、日本人のための最初のプロテスタントの教会が設立されたが、日本キリスト教会はその教会を基にしている。キリスト教禁止令が解かれたのは 1873 年であるから、時の政府の意向に反しても正しい信仰を貫こうとした人々の上に日本キリスト教会の礎は築かれたのである。

第 2 次世界大戦直前の 1938 年、日本基督教会大会議長であった富田満は政府の意向を受け、朝鮮を訪問し、神社参拝を拒否していた長老教会を説得した。第 2 次世界大戦中、日本基督教団は宮城遥拝し、戦争に協力した。私達の信仰が問われた時代であった。

1945 年 12 月、敗戦後最初の日本基督教団常議員会が開かれ、ある議員から「教団統理者は戦争責任をいかに考えるか」と質問された時、富田満は「余は特に戦争責任者なりとは思わず」と答え、神社参拝と戦争協力の罪責を自覚せず、悔い改めをしなかった。

その後、日本基督教団に信仰の問題が発生した。偶像礼拝したソロモンの後、北イスラエルと南ユダに分裂したが、それと同様に日本基督教団も分裂し、多くの教会が去った後に初めて信仰の問題に対処した（信仰の問題が発生した時、日本基督教団は、目に見えないけれども大きな力を持つ方に心をかたくなにされたのではないだろうか）。

分裂した教会の 1 つが日本キリスト教会に属していた教会であり、その教会は日本キリスト教会の名称・憲法規則・信仰告白を継承した。そして、日本で最初のプロテスタントの教会を礎にしている、と言った。

ところが、今の日本キリスト教会は、第 2 次世界大戦前・戦中に犯した自分達の教会の誤りを露にするのを恐れるのか、大会のホームページでは日本キリスト教会の沿革について、戦前・戦中を避けて次の通り記述している。

「日本キリスト教会は、1951 年春日本基督教団から離脱した 39 の教会・伝道所が、三つの中会を形成して、同年 5 月創立大会を開き、旧日本キリスト教会の信仰告白と憲法規則を継承し、その名称を踏襲して歩み出した教会です。」

神が求めるものは何か。それは砕けた魂である。私達の信仰の弱さを省み、神に許しを求めることが求められているのではないだろうか。神がイエスをこの世に賜ったのは、私達が自分の罪を自覚し、イエスを和解の羊として食事を共にすることを求めたのである。

また、イエスはマタイ 5:16 で次のように言われた。「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

けれどもイエスの求めに応じなければ、イエスは次の通り言うだろう。

「だから、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて初めのころの行いに立ち戻れ。もし悔い改めなければ、わたしはあなたのところへ行って、あなたの燭台をその場所から取りのけてしまおう。（ヨハネ黙示録 2:5）」

昔、日キと言えば、日本最初のプロテスタントの教会である日本キリスト教会を指した。ところが、日本キリスト教会がその歴史を隠すようになってから、日キと言えば日本キリスト教団を指すことが増えてきた。目に見えないけれども大きな力を持つ方が、日本キリスト教会に対する警告として、働かれたのではないだろうか。

<読書紹介>

「犠牲のシステム 福島・沖縄」 高橋哲哉著（集英社新書）

川越 弘（編集部）

高橋哲哉氏は、2008年10月4日の第58回日本キリスト教会大会の前日、西宮中央教会で「靖国・国家・教会」の題で講演（大会靖国委員会主催）された、『靖国問題』の著者である。福島県出身の彼は、福島原発事故を我が事のように受け止めていることをこの書物から知った。

その内容は、第1部 福島 「第1章 原発という犠牲のシステム」、「第2章 犠牲のシステムとしての原発、再論」、「第3章 原発事故と震災の思想論」、第2部 沖縄 「第4章 植民地としての沖縄」、「第5章 沖縄に照射される福島」とある。200余ページにわたる論文を1000字にまとめることは困難ではあるが、教えられたことを記してみたい。

「はじめに」において、「福島の原発事故は、戦後日本の国策であった原発推進政策に潜む『犠牲』のありかを暴露した。沖縄の米軍基地は、戦後日本にあって憲法にすら優越する『国体』のような地位を占めてきた日米安保体制における『犠牲』のありかを示している。私はここから、原子力発電と日米安保体制とをそれぞれ『犠牲のシステム』にとらえ、ひいては戦後日本国家そのものを『犠牲のシステム』としてとらえかえす視座が必要ではないか、と考えた」（p3）と記している。

彼は「原発のシステムでは、有る者（たち）の利益が、他の者（たち）の生活（生命、健康、日常、財産、尊厳、希望等々）を犠牲にして生み出され、維持される。…この犠牲は、通常、隠されているか、共同体（国家、国民、社会、経済、企業等々）にとっての『尊い犠牲』として美化され、正当化されている。そして、隠蔽や、正当化が困難になり、犠牲の不当性が告発されても犠牲にする者（たち）は、自らの責任を否認し、責任から逃亡する。この国の犠牲のシステムは、『無責任の体系』（丸山眞男）を含んで存立する」（p27,8）という。

また「沖縄」についても語る。野村浩也の「無意識の植民地主義」を引用して、「ほとんどの日本人は、安保を成立させた自己の責任を自覚していないし、沖縄人に在日米軍基地を押し付ける…（という）安保の当事者…意識はほとんどない。…自分こそが沖縄人に安保の負担を過剰に押し付けている張本人だということを、ほとんどの日本人が忘却でき、…無意識に沖縄人に基地を押しつけ、無意識のうちに沖縄人を犠牲にすることによって、無意識のうちに沖縄人から利益を搾取することが可能になったのだ。すなわち、ほとんどの日本人は自らの植民地主義に無意識なのである」と語る（p184,5）。

ここに著者は、「靖国神社は、戦争で倒れた日本軍兵士たちを、『お国ために』自己の生命を犠牲にした『英霊』として、その功績をたたえ、…遺族を心理的に慰撫するだけでなく、国民を戦争に動員し、戦死者を出しつづける国家指導者層の責任への問いかけを封じる役割を果たした」、「戦前・戦中の靖国のシステムと同質の犠牲の論理」を見ている（p62）。

私はこれを読んで、日本人の精神構造は、「靖国の犠牲のシステム」に徹底的に洗脳されているということ、広くそして深く確認することが出来た。

<ヤスクニ・ニュース>

超党派議員 81人が靖国参拝

超党派の「みんなで靖国神社に参拝する国会議員の会」（会長・古賀誠自民党元幹事長）が20日午前、春の例大祭を前に靖国神社を参拝した。民主党12人、国民新党2人、自民党54人、たちあがれ日本4人、みんなの党3人、新党大地・真民主1人、新党さずな1人、無所属4人。衛藤征士郎衆院副議長や尾辻秀久参院副議長のほか、政府側からは国民新党の森田高総務政務官が参拝した。23日、自民党の谷垣禎一総裁、大島理森副総裁らは春季例大祭に合わせて東京・九段北の靖国神社に参拝した。

（産経4月20、23日）

自民憲法改正草案憲法

9条に国防軍 天皇は「元首」

自民党は27日、新たな憲法改正草案を発表した。9条に首相を最高指揮官とする「国防軍」を持つと明記し、天皇を「日本の元首」と規定、国旗・国歌への尊重義務を設けるなど、05年にまとめた新憲法草案より強い保守色を鮮明にした。日本が独立したとするサンフランシスコ講和条約の発効から60年となる28日に合わせて決定した。

（毎日4月27日）

<集会案内>

第25回政教分離訴訟全国交流集会

第31回政教分離を守る北海道集会

6月1日（金）

各訴訟団報告会

講演会「犠牲のシステム—靖国・沖縄・福島」

講師：高橋哲哉（東大教授）

場所：旭川トーヨーホテル

日時（金）18：30 入場無料

6月2日（土）

シンポジウム

砂川政教分離訴訟現場検証ツアー

東京中会連合婦人会一日修養会

主題：「私たちは原子力発電をどう考えるか」

講師：上山修平（横浜海岸教会牧師）

場所：柏木教会 会費：500円

日時：6月18日（月）10：30～16：00

改定入管法学習会

主題：「入管法の改定で外国籍住民の生活はどうなるのか！？」

講師：鄭栄桓（明治学院大学講師）

場所：蒲田御園教会

日時：6月24日（日）15：30～18：00

共催：関東外キ連・神奈川外キ連

<新刊DVD案内>

「市有地に神社があるの！？」

…砂川政教分離訴訟の軌跡…

砂川政教分離訴訟を支える会製作の

DVD（砂川政教分離訴訟をスライド）訴訟の内容が非常に判りやすく纏められており、一見の価値がある。カンパ500円（送料共）申し込み先；〒073-0032 滝川市明神町1-4-29 Fax0125 (23) 3034 日本キリスト教会滝川教会気付 「砂川政教分離訴訟を支える会」

<編集後記>

佐喜真美術館に、丸木位里・俊「沖縄戦の図」が常設されている。そのすさまじい「戦争の闇」に目を凝らして見ると、「闇の向こうにある光」が透けて見える。今日、私たちは過去の戦争の実相を直視しなすすぎるために、将来の展望が見えにくいことはないか。（k）

688号 ヤスクニ通信 2012年5月13日
発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会
発行人 加藤正勝 編集人 川越弘
印刷・発行 栗田英昭
（多摩ニュータウン永山伝道所）
〒206-0025 東京都多摩市永山1-16-11
TEL&FAX 042-376-9514